群教セ	F08 - 01
	平19.239集

規範意識の醸成・育成に関する研究

── 実態把握から評価までの実践に基づいたモデルの提案 ──

長期研修Ⅰ研修員　鈴木　守幸　　園田　幸男

《研究の概要》

本研究は、児童生徒の規範意識を醸成・育成するため「実態把握→課題の明確化→課題解決→評価」の実践を行い、それに基づいたモデルを提案するものである。具体的には、学級の傾向を簡単に把握できるようにアンケート結果をパターン化し、課題の明確化をしやすくした。次に、課題解決に向けて、パターンの特徴を生かした授業展開や日常指導などを行い、変容を見て評価した。このような一連の流れをモデルとしてまとめた。

キーワード　【生徒指導　規範意識　モデル　実態把握　パターン　授業実践】

Ⅰ　研究の背景とねらい

1　現状と課題

社会的自立の遅れや重大な問題行動の多発などが、児童生徒をめぐる今日的な課題となっている。

この課題の背景には、児童生徒自身の規範意識の低下、家庭や地域における教育力の低下などの問題があると言われている。

問題行動の予防や解決、児童生徒の健全育成に当たっては、児童生徒の規範意識を高め、社会的自立を促すことが必要である。

学校現場においては、「その場しのぎの行動をとる」「悪いと分かってはいてもやめられない」「自主性が乏しく他人任せにする」など、規範意識が十分にはぐくまれていないと思われる児童生徒も見られる。

このような状況の中で、群馬県総合教育センターでは、昨年度「児童生徒の規範意識醸成のための調査研究」に取り組み、その研究成果として、以下の４点が示された。

◎　児童生徒の「意識」「行動」に関する実態を大人が正確に理解することが重要である。

◎　児童生徒、保護者それぞれに対して、意見を交流し合う話合いの場を提供していくことが重要である。

◎　児童生徒が基本的生活習慣を身に付けられるように、学校と家庭の両者が児童生徒に声をかけていくことが重要である。

◎　『ぐんまの子どものためのルールブック50』を家庭や学校で活用することが重要である。

しかし、昨年度はデータの収集に重点を置いたため、プログラムの実践や、アンケートの分析・活用法についての研究を行うまでには至らず、今年度の課題として残された。

2　関連施策等

「生徒指導体制の在り方についての調査研究報告書－規範意識の醸成を目指して－」（国立教育政策研究所　2006）によると、規範意識とは「人間として従うべき価値判断の基準（規範）を守り、それに基づいて判断したり行動したりしようとする意識」であるとされている。

同時に、規範意識は「家庭における、しつけ、睡眠や食事等の基本的な生活習慣、又は家庭の手伝い等に関する教育を土台とし、その土台のもとに、学校教育において、きまりを守ること及び他者との関わりを大事にするための具体的な活動を通じてはぐくまれるもの」であるとされている。

この報告書では、学校教育に対して、「きまりを守ること及び他者との関わりを大事にするための具体的な活動」を求め、規範意識を醸成・育成するためには、きまりを守ることに関する取組とともに、人間関係作りの大切さを指摘している。

また、群馬県教育委員会では、「ぐんま子どもいきいき推進会議（平成17年３月）」での「子どもの規範意識の醸成」の提言を受け、学校での具体的な取組を図ることを求めている。さらに、県民から、子どもたちに身に付けてもらいたいルールを公募し、『ぐんまの子どものためのルールブック50』として発行した。

本研究は、上記の報告書や施策に盛り込まれた考え方を踏まえて取り組んだ。

3　ねらい

児童生徒の規範意識を醸成・育成するために、規範意識にかかわる、「実態把握の方法とそれに基づく課題の明確化、解決に向けた取組、評価の在り方」について実践し、それに基づいたモデルを提案する。

Ⅱ　「規範意識の醸成･育成モデル」について

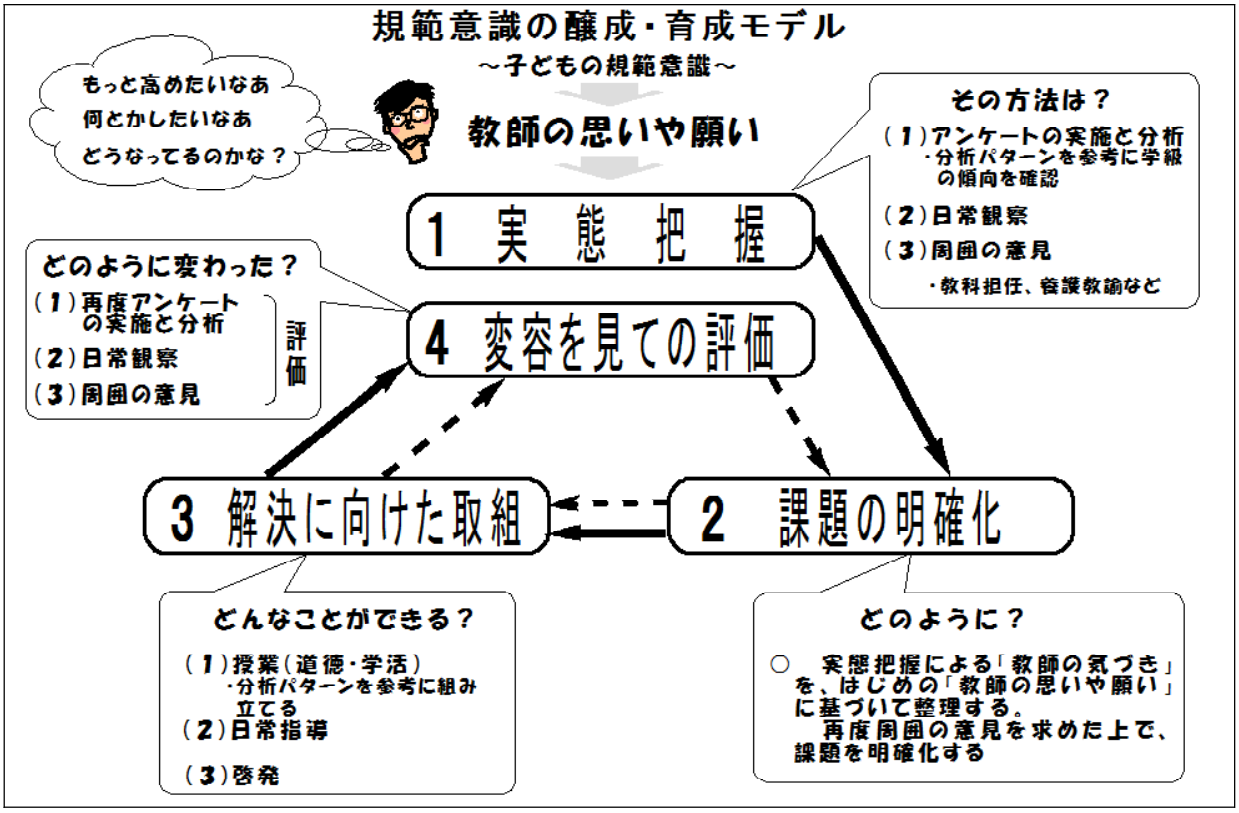


図１　規範意識の醸成･育成モデル

規範意識を醸成・育成するための実践研究では、何十通りものアンケートの分析法や授業展開を検討してきた。その中で見えてきたのは、実態把握に基づいて解決に向けた取組をする（例えば、規範についての授業や啓発活動など）ことが、規範意識を醸成・育成するために重要であるということである。そこで、規範意識を醸成・育成するために、「実態把握→課題の明確化→解決に向けた取組→変容を見ての評価」の一連の流れ（１サイクル）をモデルとして捉え、このサイクルを必要に応じて繰り返すことを提案する。

図１は一連の流れをまとめた規範意識の醸成・育成モデルである。

モデルにおける実態把握から評価までの概略を以下に示す。具体的な手だてについては後述する。

1　実態把握について

子どもの規範意識にかかわる、「教師の思いや願い」を実現していくためには、まず実態把握をすることが重要である。

その方法として提案するのは、

(1)　「アンケート」の実施と分析の方法
（「分析のパターン化」を含む）

(2)　「日常観察の視点」を生かした見取り方

(3)　「周囲の意見」の積極的活用

の３点である。

2　課題の明確化について

課題解決に向けた取組を効果的なものにするために、課題を明確化することは重要である。

課題を明確化する際には、実態把握から見えてきた「教師の気づき」と、はじめの「教師の思いや願い」、さらに「再度周囲の意見」を参考にしながら検討することで、これから取り組む課題を具体的に設定することが求められる。

3　解決に向けた取組について

このように、実態把握に基づいて課題を明確にし、その解決のための授業を組み立てて実践する。合わせて日常指導や保護者への啓発活動を行うことが効果的である。

4　変容を見ての評価について

子どもの変容を確認することで、今までの指導の成果や課題を明らかにし、その評価を次のサイクルに生かすことが求められる。

Ⅲ　モデルに基づいた具体的な手だてについて

図１に示した１から４について、実践研究の成果を踏まえて、具体的な手だてを提案する。

1　実態把握の方法

(1)　アンケートによる実態把握と分析の方法

ア　「児童生徒の規範意識実態把握プログラム Ver.2.0」について

昨年度の調査研究において作成した「児童生徒の規範意識実態把握プログラム Ver.1.0」では、A（規範を守る態度に関する意識）、B（学校・家庭生活に関する意識）、C（規範を守る行動に関する意識）、D（保護者からの働きかけに関する意識）、E(教師への要望に関する意識）の５観点（以下、それぞれA・B・C・D・Eと表記する）の平均をグラフ化して表示した。

今年度の研究では、このプログラムをさらに使いやすくするための工夫を加えた。まず、アンケートの信頼性を高めるために、18年度のデータと、19年度のデータ（小中研究協力校の62学級分）を合わせ、データの標本数を増やした。

また、学級担任として実態把握をするためには、５観点だけではなく、質問項目ごとのデータが必要であることが分かった。そこで図２のように22の質問項目を観点別に並べ替えて、小・中学校の平均値を表示し、実施したデータの質問項目ごとの数値と、観点ごとの見方を入れたシートを表示できるようにした。こうすることで、５観点別の傾向とともに、22項目の中で何が低くて、何が高いかを把握することができる。

このような工夫を加えた、「児童生徒の規範意識実態把握プログラムVer.2.0」（以下、Ver.2.0と表記する）は、当センターのWebページからダウンロードすることができる。これを活用することで、より適切な実態把握を進めたい。

イ　５観点に基づく働きかけの方向性について

アンケートの５観点のうち、A、B、Cは、子どもが自分のことを自己評価したものである。また、DとEは、子どもの保護者や教師に関する意識である。

子どもに直接働きかけるためには、A・B・Cにかかわる取組を行い、保護者や教師のかかわりを通して子どもに間接的に働きかけるためには、D・Eにかかわる取組を行うことになる。

ウ　分析のパターン化について

「Ver.2.0」で示された、５観点や22の質問項目の分析結果の他に、傾向を簡単につかみ、解決に向けた取組の方向性を考えることができるようにパターン化を試みた。（表１参照）

No.	質　問　項　目	小学校平均	中学校平均	実施データ	観点ごとの見方
2	学校のものをわざとこわすのはいけないと思う	3.912	3.801		規範を守る態度に関する意識 児童生徒の規範を守ろうとする意識の様子がとらえられます ・No.2は、公共心にかかわる項目 ・No.5は、No.14と連動　いじめにかかわる項目 コミュニケーション能力 ・No.8は、規範意識の基になる項目 ・No.12は、No.14と連動　いじめにかかわる項目 ・No.17、22は、非行にかかわる項目 A
5	友達を仲間はずれにするのはいけないと思う	3.764	3.582		
8	みんなで決めたルールやきまりにしたがわないのは、いけないと思う	3.712	3.509		
12	人をぶったりけったりする(暴力をふるう)のは、いけないと思う	3.737	3.592		
17	小学生(中学生)がたばこを吸ったり、酒を飲んだりするのはいけないと思う	3.882	3.746		
22	小学生(中学生)が万引きをするのはいけないと思う	3.948	3.860		
1	学校での生活は楽しい	3.349	3.188		学校・家庭生活に関する意識 児童生徒の学校や家庭での適応感、安心感にかかわる意識の様子がとらえられます ・学校、家庭における安心感を見る観点 ・No.1は、数値が高い場合、充実していて楽しいのか、安易な方向に流れて楽しいのか判断が必要である ・No.9は、低い場合は自信を失っている可能性がある ・No.13は、帰属感にかかわる項目 ・No.18は、学校、家庭における満足度や心の状態にかかわる項目 B
9	勉強は好きだ	2.649	2.074		
13	遊びに行くときには、行き先と帰る時間を家の人に伝えている	3.464	3.041		
18	身の回りの動物や植物をいじめたり傷つけたりしないようにしている	3.617	3.458		
3	放課後は寄り道をしないで、家または学童保育などに帰っている(小) 放課後、または部活動が終わった後、寄り道をしないですぐに家に帰ったいる(中)	3.598	3.550		規範を守る行動に関する意識 児童生徒の規範を守る行動についての自己評価の様子がとらえらます ・No.3は、下校指導などの定着度を見る項目 ・No.6は、公共心にかかわる項目 ・No.10は、規範意識の基になる項目 ・No.14は、No.5、12と連動　いじめにかかわる項目 コミュニケーション能力 ・No.19は、責任感にかかわる項目 C
6	学校のもの(いすや机、そうじ用具など)をこわさないよう大事にしている	3.682	3.467		
10	約束やきまりを守っている	3.268	3.099		
14	友達の悪口を言わないようにしている	3.105	2.893		
19	気がすすまないことや、めんどうくさいことでもとちゅうで投げ出さないようにしている	3.135	2.916		
4	家の人はあなたに、「人に会ったとき、あいさつをすることの大切さ」について話してくれる	3.103	2.709		保護者からの働きかけに関する意識 児童生徒の意識から家庭での規範に関する働きかけの様子がとらえられます ・生徒の「保護者から言われている意識」を見る項目 ※　保護者が話をしていても生徒の意識が低い可能性もある 数値が低い場合、保護者の思いを把握し、それを生徒に伝えることが有効 D
7	家の人はあなたに、「約束やきまりを守ることの大切さ」について話してくれる	3.331	2.978		
15	家の人はあなたに、「友だちを仲間はずれにしないようにすることの大切さ」について話してくれる	3.251	2.868		
20	家の人はあなたに、「したいことがあっても、ルールやきまりを守ってがまんすることの大切さ」について話してくれる	3.190	2.829		
11	先生には、ルールやきまりについて注意するとき、何がどう悪かったのか、分かるように話してほしい	3.448	3.384		教師への要望に関する意識 ルールやきまりに関する教員の指導に対する意識の様子がとらえれます ・数値が高い方が規範意識が高いと判断するが、生徒が満足していて低い数値になる場合もある　学級の日常観察から判断する ※　意識が低いと判断した場合、生徒と教師の信頼関係を築く必要がある E
16	先生には、ルールやきまりについて、自分たちで考える機会を作ってほしい	2.961	2.790		
21	ルールやきまりについての授業や学習を充実させてほしい	2.928	2.708		

22項目別のデータ

図２　質問項目ごとの見取りシート

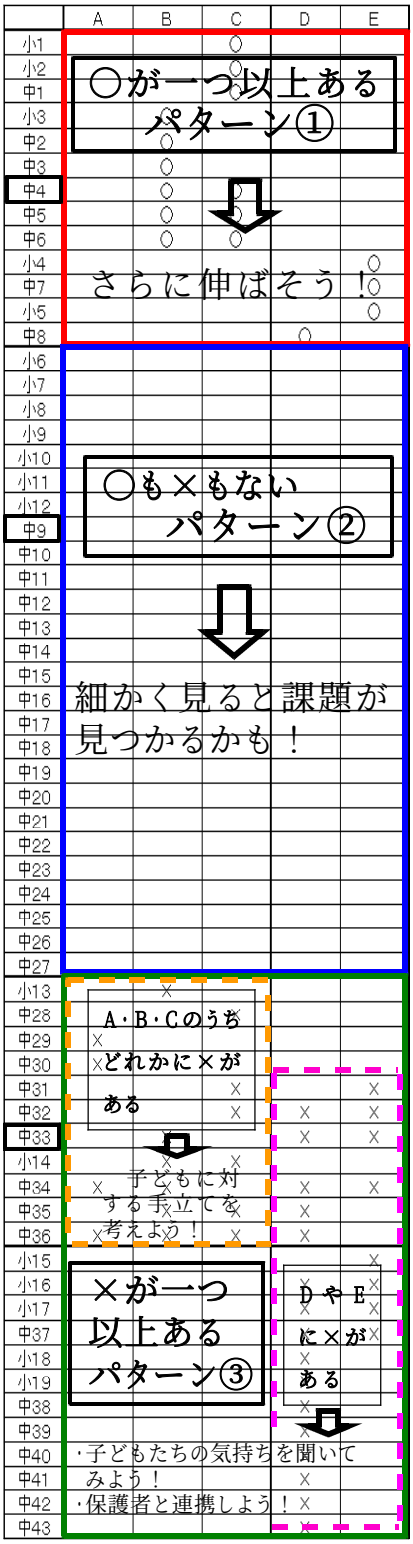
表1　アンケート結果に基づくパターン化

☆　パターン化の目安　(平均値±0.2)

５観点の数値を小・中学校それぞれの平均値と比べて0.2以上高い場合は○、0.2以上低い場合は×で示し、研究協力校（62学級）のアンケート結果を３つのパターンに分類することで、大まかな傾向をつかめることが分かった。0.2以外の数値（0.1、0.15など）でも処理してみたが、顕著なパターンは、見い出せなかった。下に示した枠は、その３つのパターンである。

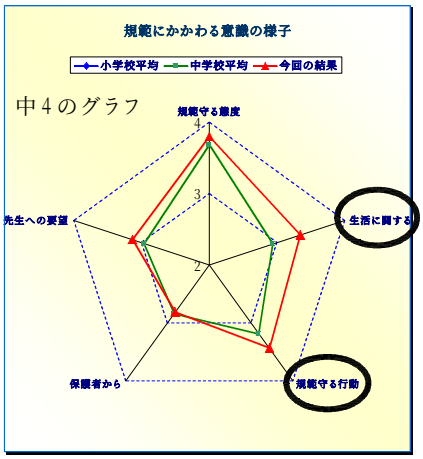
☆　パターンに分けて対応を考える

アンケート結果が、どのパターン（①～③）になるかを検討し、取組の方向性を考える。



（平均値より0.2以上高い時　○、低い時　×）

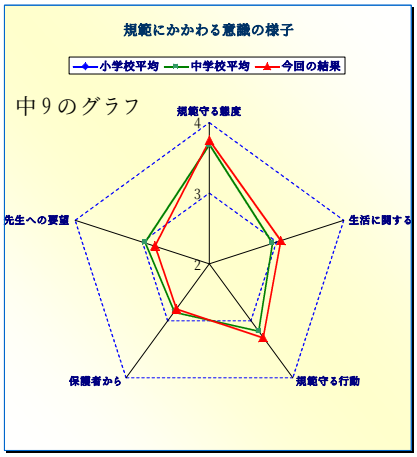
★　パターン① の例　〈開発的な取組が有効〉



研究協力校（62学級）のアンケート結果では、小学校５学級、中学校８学級、計13学級がこのパターンに当てはまった。

規範意識はおおむね良好であると考えられる。さらに、規範意識を伸ばすための開発的な取組を実施できるとよい。

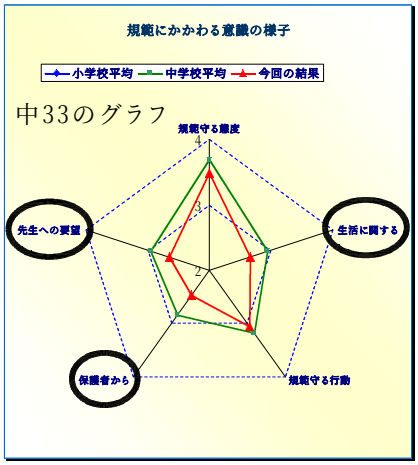
★　パターン② の例　〈予防的な取組が有効〉



研究協力校（62学級）のアンケート結果では、小学校７学級、中学校19学級、計26学級がこのパターンに当てはまった。

５観点の規範意識は平均的である。ただし、各観点を構成する22の質問項目の数値を細かく見ていくと課題が見えてくる可能性がある。

★　パターン③ の例　〈問題解決的な取組が有効〉



研究協力校（62学級）のアンケート結果では、小学校７学級、中学校16学級、計23学級がこのパターンに当てはまった。

規範意識の中で、十分に育っていないところがあると考えられる。何らかの具体的な取組を早期に検討したい。

■　**どのパターンにおいても、数値だけに頼ることなく、日常観察などを参考にして実態把握に取り組むことが大切である。**

(2)　「パターン別の日常観察の視点」の活用

日常観察の重要性は周知のことであるが、その教師の日常観察とアンケート結果を関連させて実態把握を行いたい。

その際に、実践研究の成果から、規範意識の醸成・育成に焦点を当てた観察の視点を設定すると、より実態に即した把握が可能になることが分かった。

そこで、パターン別の視点と、場面ごとの担任としての留意点を含めたものを「パターン別の日常観察の視点」として表２にまとめた。

表２　パターン別の日常観察の視点

		パターン① 開発的な取組	パターン② 予防的な取組	パターン③ 問題解決的な取組
視点		・学級全体の子どもの様子を見る。 ・意欲は見えるが、どう取り組んでいいか分からない子に注目する。	・グループや小集団を見る。 ・小さなトラブルでの人間関係や発生頻度に注目する。	・個人やその周囲を見る。 ・気になる子だけにとらわれることなく、その周囲の人間関係にも注目する。
担任としての留意点	授業中	・自分の考えをもってはいるが、積極的になれない子はいないか。 ・活発に見える子が周囲への気配りをしているか。	・グループ活動に参加できない子がいないか。 ・教師の指示が徹底しないことがないか。	・勝手なおしゃべりや手悪さなどをしていて、話を聞いていない子はいないか。 ・発言者をからかう雰囲気はないか。
	休み時間	・声をかけられても、集団に入れない子はいないか。 ・いつも他学級の子と過ごしている子はいないか。	・休み時間のたびに、教室から出ていく子はいないか。 ・他人の悪口などを言っている子はいないか。	・チャイムを守れない子が複数いないか。 ・グループ化した集団の乱暴な言動がみられないか。
	係や清掃	・取組が不十分な子を注意する雰囲気があるか。 ・集中せず、ぼんやりしている子はいないか。	・教師から注意されると、その場だけ繕う雰囲気がないか。 ・特定の子だけで仕事をしていないか。	・いつも消極的な子が複数いないか。 ・個人の道具が紛失したり、掃除用具の損傷が多かったりしないか。

(3)　周囲の意見の活用

アンケート調査と日常観察、さらに対象の児童生徒にかかわっている教師の意見を参考にして、的確な実態把握を行う。特に、別の角度からの情報をもっている養護教諭との連携を密にする。

これまでに述べてきたアンケートによる数値のデータと日常観察、周囲の意見は互いを補い合うものとしてとらえたい。データから気付いたことについて観察してみる。また、観察から気付いたことについてデータを参照してみる。さらに周囲の意見を聞き、情報を集めることで、的確な実態把握につなげることができる。

2　課題の明確化

規範意識にかかわる児童生徒の実態を的確に把握すると、できていることやできていないことが見えてくる。このような「教師の気づき」をはじめの「教師の思いや願い」に基づいて整理した上で、「再度周囲の意見」を求めて参考にする。こうすることで、「このようなことについて、伸ばしていこう」という、具体的な課題が明確化されると考える。

図３は、実態把握から課題の明確化までの実践例として、アンケート結果がパターン②に当たる学級の場合を図に表したものである。

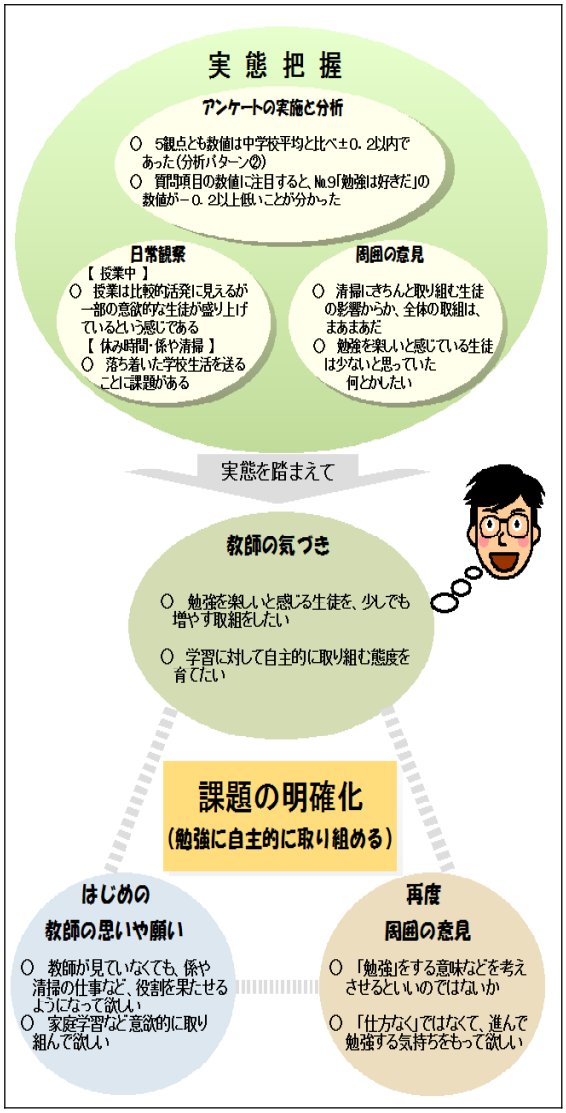


図３　課題の明確化までの実践例

このように課題を明確化することで、より具体的で、児童生徒の実態に即した取組が可能になると考える。

3　解決に向けた取組

(1)　授業（道徳・学活）における取組

規範意識を醸成・育成するための具体的な手だてとして、まず、授業での実践から取り組みたい。

これまでに述べてきたように、実態把握に基づいて課題を明確にし、その解決のために授業を展開することは、規範意識を醸成・育成するために高い効果をもたらすと考える。

実践研究で行った９時間分の授業展開から、規範意識の醸成・育成のための取組では、導入での緊張ほぐしや、ねらいについての説明がより重要となる場合があることが分かったため、導入場面と展開場面に分けて留意点を考えた。

授業展開を作成する際に配慮したいパターン別の留意点を表３に示す。

表3　パターン別の授業展開上の留意点

パターン	導入場面（緊張ほぐし）	展開場面（話合いや体験活動）
パターン① 開発的な取組	規範意識を学級全員で高めよう。	
	・意識が高いと考えられるので、なるべく短時間で本論に入る。	・授業の中で、周囲に気を配れるようなリーダーを育成する。 ・全員にいろいろな立場や役割を体験させ、リーダー性を養う。
パターン② 予防的な取組	規範意識をグループや小集団の仲間と一緒に高めよう。	
	・本論への意識づけを高めるため、導入の段階から目的やねらいをはっきりさせる。	・授業の中で、小集団やグループのリーダーとなれる子どもを育成する。 ・できる範囲で立場や役割を交代してみる。
パターン③ 問題解決的な取組	規範意識を、まず、個人で高めよう。	
	・意識があまり高くなく、子どもが身構えてしまう可能性がある場合、アイスブレーキングなどを丁寧に時間をかけて行い、緊張をほぐしてから本論に入る。	・グループ活動におけるメンバー構成では、グループが均等になるように留意する。 ・子どもの実態を配慮しワーク集をそのまま行うのではなく、十分に内容を精選して行うことが望ましい。

(2)　日常観察の視点を生かした日常指導

次に、日常における指導に取り組みたい。パターン別日常観察の視点（表２）を参考に、日常指導のねらいや在り方（表４）を作成した。

また、授業中の指導については、表３の各パターン別の留意点を生かして指導を行いたい。

表4　日常指導のねらいや在り方

パターン	授業中の指導	授業以外の指導（休み時間、係、清掃）
パターン① 開発的な取組	・周囲に気配りができるリーダーを育てる。 ・どの子にも発言をする機会を与え、お互いに認め、高め合う集団を作る。	・周囲と、自分からかかわることの大切さについて援助・指導する。 ・努力目標を設定したり、自分の活動を自己評価したりする振り返りの場面を設定する。
パターン② 予防的な取組	・グループ活動が活発になるようリーダーを育てる。 ・話し方や聞き方を学ばせ、教師の指示が徹底するようにする。	・言葉遣いを指導する。 ・子どもの活動の姿を、教師や他の子どもが認めることで、自己有用感がもてるようにする。 ・日頃から、全員で係や清掃活動をするように徹底する。
パターン③ 問題解決的な取組	・授業中のルールを徹底し、授業に集中できるようにする。 ・級友の意見をよく聞き、自分の意見と比べ、相手を尊重できるようにする。	・時間を守って行動する習慣をつける。 ・気になる言動について、人間関係やその子の性格などの背景を考えながら指導する。 ・ときには、教師も子どもと一緒に活動し、思いを共有する。

(3)　啓発活動

課題解決の効果を上げるためには学校だけでは限界があり、保護者と連携することが望まれる。

昨年度の調査研究から、規範意識の醸成・育成について、保護者は関心をもっていることが分かっている。そこで、保護者の声をコメントとして寄せてもらい、授業に生かしたり、学級だよりに児童生徒の変容の様子や学習内容、アンケート結果などを載せたりして、家庭の協力を得ながら課題解決を図ることが啓発として効果的である。

このようにすることで、家庭内でも規範意識を高めようとする意識が生まれ、学校と家庭での取組に相乗効果が望める。

また、学校全体で組織的に啓発活動に取り組むことも有効である。例えば、学校通信・生徒指導だより・『ぐんま子どものためのルールブック50』などを活用したり、全校朝礼・児童会・生徒会・ＰＴＡ活動・Webページなどで、規範意識にかかわる内容を取り上げたりする取組が考えられる。

4　変容を見ての評価

「実態把握」→「課題の明確化」→「解決に向けた取組」まで終了したら、再度アンケートを行って、数値を前回と比較したり、日常観察の視点

や周囲の意見に基づいて児童生徒の変容を見取ったりしながら、総合的に評価していくことが重要である。そうすることで、新たな気づきが生まれると考える。

この気づきを生かし、再び課題を設定して取り組むという、円環的な指導につなげたい。

評価において留意すべき点としては、一通り実践を行った後、課題と直接関連する観点や質問項目の数値が下がる場合がある。それは、このアンケートが児童生徒の自己評価を問うものだからである。児童生徒の規範意識が高まることで、自己評価のハードルが上がったとすれば、逆に数値が下がることも考えられる。数値については、このことも考慮した上で取り扱う必要がある。数値の上がり下がりに一喜一憂するのではなく、日常の子どもの姿を見ていくことが大切である。

Ⅳ　モデル実践例

ここに示した例は、子どもに直接働きかけるために５観点の中のＡ、Ｂ、Ｃにかかわる取組を行ったものである。そして、モデルの「実態把握→課題の明確化→解決に向けた取組→変容を見ての評価」までの流れを具体的に実践したものである。小学校では連続した４時間の授業、中学校では５時間の授業を実践した。その中から、各１時間分の実践を記す。（この９時間の授業展開例等は、資料編を参照）

1　パターン③の実践（小学校）

(1)　教師の思いや願い

・集団のルールや決まりを身に付けさせたい。
・本音で話し合える雰囲気を作りたい。

(2)　実態把握

ア　アンケートの実施と分析

表５を見ると、５つの観点すべてが平均値を下回っており、ＢとＤに×があるパターン③である。

表5　5観点の数値

観　　点	学級の値	小学校平均値	平均値との差	○・×
A 規範を守る態度	3.70	3.83	-0.13	
B 学校・家庭生活	2.90	3.27	-0.37	×
C 規範を守る行動	3.21	3.36	-0.15	
D保護者からの働きかけ	3.02	3.22	-0.20	×
E 教師への要望	2.93	3.11	-0.18	

(平均値より＋0.2以上＝○、－0.2以下＝×)

イ　日常観察

「パターン別日常観察の視点」を参考に観察をしてみると、次のような実態が見えてきた。

【授業中】

・教師や級友の話をきちんと聞いていない場面も見られる。
・子どもが、正論を発言する場面が、あまり見られない。

【休み時間、係や清掃】

・きちんと時間を守って行動できる児童が増えてきたが、まだ十分ではない。
・集合した時に、静かに待ったり、次の行動を考えたりすることができる児童が、あまり多くない。

ウ　周囲の意見

・決められたことを、最後までやり通せるようになるといい。
・かかわる力を身に付けさせたい。

(3) 課題の明確化

ア　はじめの「教師の思いや願い」に基づいて、「教師の気づき」を整理する

・「学校･家庭生活」と「保護者からの働きかけ」の数値が低いが、実態と合わせて考えると、まず「規範を守る行動」を高めていきたい。
・数値の低いところに焦点を当てるより、平均的なところを高めることで、「思いや願い」に迫りたい。

イ　再度周囲の意見を参考にする

・集団のルールや決まりを身に付けさせれば、トラブルが減るかもしれない。
・級友とかかわりながら、自己表現できるようになるとよい。

以上のことを総合的に判断して、数値が低い観点について取り組むよりも、平均的な観点を取り上げて指導する方が効果的ではないかという結論を得た。

そこで、「規範を守る行動」に注目して、この学級の「規範を守る行動」にかかわるアンケートの質問項目とその数値を調べたものが、表６である。

「規範を守る行動」の観点の中で、質問項目番号３以外は平均を下回っている。その中でも、10、14、19の３点が低い。

このようなことから、規範意識にかかわる学級課題を「級友とかかわり、集団のルールや決まりを身に付けさせる」とした。

表6　「規範を守る行動」の数値

質問項目番号	アンケートの質問項目	学級の値	小学校平均値	小学校平均値との差
3	放課後は寄り道をしないで、家または学童保育などに帰っている。	3.67	3.61	0.07
6	学校のもの（いすや机、そうじ用具など）をこわさないよう大事にしている。	3.67	3.69	−0.02
10	約束やきまりを守っている。	3.12	3.28	−0.16
14	友だちに悪口を言わないようにしている。	2.76	3.12	−0.36
19	気がすすまないことやめんどうくさいことでもとちゅうで投げ出さないようにしている。	2.82	3.14	−0.32

(4) 解決に向けた取組

ア　授業（学級活動）

規範意識にかかわる学級課題「級友とかかわり、集団のルールや決まりを身に付けさせる」を解決するため、質問項目番号10、14、19に関連する授業実践を行った（学活３時間、道徳１時間）。その中の、２時間目(学活)の授業について記す。

○　題材名　「ふわふわ言葉・チクチク言葉」

○　活動内容

(2)－日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること

○　パターン③の「授業展開上の留意点」から

・導入場面（緊張ほぐし）

子どもと交流したり、モデリングをしたりしながら、緊張をほぐし、興味を高めていく。

・展開場面（話合いや体験活動）

リーダーの仕事ができる子どもが各グループに入るようにグループ分けをする。

○　本時のねらいと工夫

ねらい：ふわふわ言葉とチクチク言葉の意味を知り、弁別することができるようにする。また、ふわふわ言葉とチクチク言葉を言ったり言われたりする経験を通して、ふわふわ言葉を習得し、チクチク言葉をコントロールしようとする態度を養う。

工夫：子どもの日常生活の中で、ありがちな状況を再現するため、おはじきゲームという場面を設定して、ふわふわ言葉とチクチク言葉を言ったり言われたりする体験をさせる。また、観察者という第三者の視点から言葉のやりとりを観察させることで、自分の言動に対する自己理解を促す。

○　本時の展開と留意点

導入場面では、ふわふわ言葉とチクチク言葉の意味を知らせ、同じ言葉でも、状況や態度、言い方でチクチク言葉になったり、ふわふわ言葉になったりすることや、人によって感じ方が違うことをモデリングをしながら、分かりやすく説明した。

展開場面では、ゲームをする者と観察者に分かれ、観察者になった子どもが、気になることや自分がその言葉を言われたらどう感じるかをワークシートにメモした。

その上で、グループで観察したことや感じたことを出し合い、特に目立ったふわふわ言葉とチクチク言葉を決めた。次に、各班長に自分の班で選んだチクチク言葉とふわふわ言葉を発表させ、学級全体で分かち合った。

まとめの場面では、振り返りを行い、普段の生活で改善しようと思ったことや続けようと思ったことなどをワークシートに書かせ、発表させることで共感できるようにした。

○　授業での成果

・「相手の気持ちを考えて、嫌がることは言わないようにして、いいことをしたらほめるようにしたい」「自分はふわふわ言葉よりチクチク言葉のほうが多い」など、自分の言動を理解し、反省している感想が多くみられた。

・「軽い気持ちで言ったことでも相手が傷つくことが分かった」「何かを言う前に相手の気持ちを考えなければいけないと思った」など、他者を思いやる感想も見られた。

・おはじきゲームとその観察を通して、チームメイトとかかわり、ルールを守ることの必要性を実感させることができた。

○　授業での課題

・観察をすることが初めてであったため、グループによっては、戸惑いも見られた。繰り返し行うことで、慣れさせたい。

○　授業後の変容

継続的な指導を行うため、ふわふわ言葉・チクチク言葉調べを一週間行ったり、ふわふわ言葉を身近に感じられるように教室に掲示したりした。その結果、「今まであまり考えずに言葉を使っていたが、このように言葉を調べると、自分を変えられる気がするのでよかった」という感想を書いた子どもや「チクチク言葉をゼロにした」という子どもがいた。チクチク言葉を使わないということは、級友とかかわる際に大切なルールであるこ

とを実感し、それを実践することができた子どももいて、言葉遣いについて、子どもたちなりの気づきを得ることができた。

イ　日常指導

日常指導として、気になる言動を見つけた場合、人間関係などの背景を考慮して指導を継続した。

ウ　啓発

学級・学年・学校通信などで、ふわふわ言葉・チクチク言葉の実践について紹介し、家庭でも言葉遣いに配慮して欲しいことを知らせた。

(5)　変容を見ての評価

再度実態把握を行い、子どもの変容を見た結果、分かったことを以下に示す。

○　チクチク言葉を使わないということは、級友とかかわる際に大切なルールであることを実感し、それを実践することができた子どもがいたので、継続的な指導が効果的である。

○　アンケート結果の分析では、あまり大きな変動ではないが、22個の質問項目のうち、14個の質問項目で数値が上昇し、６個の質問項目で数値が下降した。（変動なしが、２個）

○　目に見えて変わるということは、あまりないが、正当な意見をまじめに発言できる場面が見られた。

○　聞き方や話合い活動などの指導は、繰り返し日常的に行うことが、授業の効果を上げるうえで有効であるということを再確認できた。

これからも日常指導の中で、課題解決の取組を継続したり、変容の見られた子どもを取り上げて支援したりしていきたい。

2　パターン②の実践（中学校）

(1)　教師の思いや願い

・教師が見ていなくても、係や清掃の仕事など、役割を果たせるようになって欲しい。

・家庭学習など意欲的に取り組んで欲しい。

(2)　実態把握

ア　アンケートの実施と分析

表7　5観点の数値

観　　点	学級の値	中学校平均値	平均との差
A 規範を守る態度	3.667	3.682	-0.015
B 学校・家庭生活	2.883	2.940	-0.057
C 規範を守る行動	3.080	3.185	-0.105
D 保護者からの働きかけ	2.833	2.846	-0.013
E 教師への要望	2.844	2.961	-0.117

表７にあるように、アンケート結果の数値は、５観点とも中学校平均と比べ±0.2以内なので、○も×もないパターン②になる。そこで、22の質問項目に注目すると、５観点のうち、Ｂの中の№９「勉強は好きだ」の数値が－0.2以上低い（表８参照）ことが分かった。

表8　質問項目の数値

№	質問項目	学級の値	中学校平均
1	学校 ～ 楽しい	3.133	3.188
9	勉強は好きだ	**1.733 ↓**	**2.074**
13	遊びに～	3.267	3.041
18	身の回りの	3.4	3.458

イ　日常観察

「パターン別の日常観察の視点」を参考に観察をしてみると、次のような実態が見えてきた。

【授業中】

・授業は比較的活発に見えるが、一部の意欲的な生徒が盛り上げているという感じである。

【休み時間、係や清掃】

・落ち着いた学校生活を送ることに課題がある。

ウ　周囲の意見

・清掃にきちんと取り組む生徒の影響からか、全体の取組はまあまあだ。

・勉強を楽しいと感じている生徒は少ないと思っていた。何とかしたい。

(3)　課題の明確化

ア　はじめの「教師の思いや願い」に基づいて、「教師の気づき」を整理する

・勉強を楽しいと感じる生徒を、少しでも増やす取組をしたい。

・学習に対して自主的に取り組む態度を育てたい。

イ　再度周囲の意見を参考にする

・「勉強」をする意味などを考えさせるといいのではないか。

・「仕方なく」ではなくて、進んで勉強する気持ちをもたせたい。

以上のことを総合して、規範意識にかかわる学級課題を「勉強に自主的に取り組める」とした。

(4)　解決に向けた取組

ア　授業（学級活動）

○　題材名　　「勉強」を好きになろう！

○　活動内容

(3)－学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択に関すること。

○　パターン②の「授業展開上の留意点」から

・導入場面（緊張ほぐし）

　話合いのための声出しの練習と緊張ほぐしにもなるように、生徒指導・教育相談のスキルであるアイスブレーキングを行った。

　授業のねらいや目的に合ったもの、他の意見に共感する活動を取り入れた内容とした。

・展開の場面（話合いや体験活動）

　授業の中で、グループ単位での話合い活動を取り入れ、一人一人が自信をもてるような内容で行うことで、リーダー育成を図った。

○　本時のねらいと工夫

ねらい：勉強を好きになるにはどうしたらよいかを考えることにより、自主的な学習態度を育てる。

工夫：小集団で、班長を中心にＫＪ法を取り入れて話し合う。そうすることで、一人一人の意見を出しやすくする。また、リーダーの育成を図るために、班長にはグループ内の多様な意見をまとめさせる。

○　本時の展開と留意点

６グループに分かれ、ＫＪ法で「勉強を好きになるためにはどうしたらよいか」を話し合った。

グループごとの考えを発表し合うことで、多様な考え方があることを知り、自分のこれからの行動の仕方を考えることができるようにした。

話合いの約束として、「人の話を聴く、自分の思いを話す、全員が参加する」（社会的スキル）こと、他の考えに対して絶対に否定的な意見を言わないことを徹底した。そうすることでねらいに迫るとともに、生徒が安心して自分の考えを表現することができようにした。このことを通して個々の生徒に自信をもたせ、リーダーとなれる生徒の育成を図った。

○　授業での成果

・話合いでの注意事項（話を聴く、思いを話す、全員が参加する）を徹底することにより、日頃消極的な生徒も積極的になれた。自分を表現することで自信をもたせ、学習面への動機付けを図った。

・難しい題材であったが、生徒はいつも以上に真剣に考えて、自分なりの意見をもつことができた。これは、グループという小集団で話し合い、さらに、他のグループの考えをじっくり聴くことで、勉強に対する自分の考えが深まったためと考えられる。

・ＫＪ法は、慣れていなくても方法をしっかり伝えれば、ある程度はできることが分かった。また、ＫＪ法による話合いによって、班長となった生徒は、周囲の意見をまとめようとする意識をもつことができた。

○　授業での課題

・下位群の生徒の意欲をどう引き出すか、については課題が残った。

○　授業後の変容

多くの生徒が、授業の感想で「中間テストに向けてがんばりたい」と書いていた。中間テストに向けての取組を、この授業を基に考えさせ、計画を立て、それを実行できるように支援していきたい。

授業後、テストに向け、以前よりがんばっている生徒が多く見られた。

イ　日常指導

短学活も活用して課題にかかわる指導を行った。自主的な取組が結果として表れてきた生徒を賞賛すると同時に、勉強に自信がもてないと思われる生徒を励ましていった。

また、学級全体で家庭学習への取り組み方を確認して、必要ならば個人的にアドバイスをした。

ウ　啓発

家庭に学級だよりなどで授業の様子を伝えるとともに、家庭でも、子どもたちが自信をもてるような言葉掛けをお願いした。

(5)　変容を見ての評価

再度実態把握と日常観察を行った上で、周囲の意見を取り入れて生徒の変容を見た結果、分かったことを以下に示す。

○　アンケート結果と分析では、質問項目「勉強は好きだ」の数値は上がらなかった。

　これは、生徒の土台となる意識（自己評価レベル）が上がったためという考え方もできる。

○　日常観察からは、特に中間テスト前に以前よりがんばっている生徒が多く見られた。

○　周囲の意見としては、家庭学習など以前より取組が良くなった。

これらのことを総合的に考えて、日常観察の様子を主に評価を行った。生徒の変容を保護者に知らせ、学校と家庭が連携して励ましていくことで意欲の向上を図った。

しばらく観察を続け、必要と判断した時点でこのモデル実践を繰り返すことにした。

Ⅴ　まとめ

1　成果について

(1)　規範意識の醸成・育成モデルについて

このモデルは、規範意識を醸成・育成するために、どのような授業展開や取組を行ったらよいかについて、検討する中で生まれてきたものである。

アンケートの結果や日常観察、周囲の意見などに基づいて、適切に児童生徒の実態を把握することで、取り組むべき課題が明確になり、解決に向けた取組も具体的なものになった。

この一連の流れに、「変容を見ての評価」と、円環的に繰り返す「サイクル」という視点を取り入れて作成したものが、この「規範意識の醸成・育成モデル」である。

規範意識を醸成・育成するためには、十分に児童生徒を理解した上で、具体的な取組を行うことが重要である。そのことを踏まえて作成した実践的なモデルであり、学校にとって理解しやすいものになっていると考える。

(2)　実態把握の方法について

ア　「児童生徒の規範意識実態把握プログラムVer.2.0」について

今回提示した「規範意識把握プログラムVer.2.0」は、標本数を増やして信頼性を高めるとともに、アンケートの22項目それぞれについて数値を把握できるようにした。

これによって学級担任は、観点別だけではなく、数値の高い項目や低い項目について細かく分析することができる。このため、児童生徒の実態を把握する方法の一つとして、さらに役立つプログラムになったと考える。

イ　アンケートに基づいたパターン化について

研究協力校(62学級) のアンケート結果に基づいて、傾向を簡単につかめるようにパターン化を試みた。

提示したのは３つのパターンである。参考として、例えばパターン①の場合には開発的な取組が効果的ではないかといった、各パターンに応じた取組の方向性を示した。

規範意識の醸成・育成に向けて、まずは大まかな実態を把握したい場合や、細かい分析をしている余裕がない時などに、この３つのパターン分けを参考にすることで、課題の明確化がしやすくなり、迅速な取組に役立つと考える。

(3)　解決に向けた取組について

児童生徒の規範意識の実態に応じて、開発的な取組が合うと考えられる学級に対しては、体験活動や話合い活動を主に行い、問題解決的な取組が合うと考えられる学級に対しては、導入場面を丁寧に行うなどの工夫が効果的であったため、パターン別に、授業展開の留意点や日常指導の留意点を考えて提示した。規範意識の醸成・育成に向けた取組を考える際の参考にしていただければ幸いである。

授業を中心とした実践研究では、小学校で４つ、中学校で５つの授業を行うことができた。規範意識の醸成・育成を主なねらいとして、道徳での展開や、保護者との連携、人間関係作りなどに取り組んだものである。これらの実践に基づいて、具体的な授業展開案を資料編に提示した。この展開案を、「Ver.2.0」や日常観察などを活用して把握した児童生徒の実態に応じて変えることで、各学校や学級に即した授業展開とすることができると考える。

(4)　変容を見ての評価について

これらの実践を通して、規範意識にかかわる授業や啓発活動などに取り組むことで、児童生徒は変容する、という手応えを得ることができた。他者を傷つけるかもしれない言葉を言わないようにしたいと意識することができたり、規範にかかわる保護者の思いを知って、規範を守ることの意義を再認識したりすることができたと考える。

評価を行う際に留意したいことは、アンケート結果だけではなく、日常観察や周囲の意見も取り入れて、総合的に判断することが重要であるということである。

「変容を見ての評価」を通して、多くの児童生徒は、規範を守ることの大切さを分かっているし、そう行動したいと願ってもいる、ということを感じた。その背中を押すような働きかけを、児童生徒は待っているのではないだろうか。

2　今後の課題について

今後の課題としては、次の２点を上げたい。

○　複数回のサイクルを実施する研究が必要

今年度は、モデルに示した、１回分のサイクルまでの研究を行ったため、円環的な流れについて研究を深めることはできなかった。

しかし、今年度の研究において、比較的短い期間の間に、複数回の授業を実施したところ、児童生徒に変容が見られた。このことから考えると、

サイクルを円環的に繰り返す指導の在り方について研究することは重要だと考える。

どのように取り組めばよいのか、留意点は何かなどについて研究を進めたい。

○　保護者との連携についての研究が必要

規範意識を醸成・育成するためには、学校と保護者が連携して取り組むことが重要である。今年度の実践を通して、規範意識の醸成・育成を目指した授業を活用すると保護者の協力を得やすい、という見通しを得ることができた。

今後このような、比較的取り組みやすく、保護者の協力を得やすい連携の在り方を研究することは、学校にとって意義があると考える。

「これならできる学校と保護者の連携」をテーマとして取り組んでいきたい。

＜参考文献＞

・群馬県総合教育センター　『児童生徒の規範意識醸成のための調査研究』（2006）
・国立教育政策研究所　『生徒指導体制の在り方についての調査研究』（2006）
・横浜市教育委員会　『子どもの社会的スキル　横浜プログラム』（2007）
・田上不二夫　著　『対人関係ゲームによる仲間づくり』（2004）
・上野　一彦、岡田　智　著　『実践　ソーシャルスキルマニュアル』（2007）
・佐藤　正二、相川　充　著　『実践　ソーシャルスキル教育　小学校』（2006）